

琉球弧沖縄島南部に位置する地背斜上の中城湾，南風原町，金武湾の陥没地形と活断層の配列

Arrangement of depressions situated on the geanticlines, and active transverse faults in southern Okinawa-jima Island, Japan.

森本 英揮[1]; 木庭 元晴[2]

Hideki Morimoto[1]; Motoharu Koba[2]

[1] 関西大・院; [2] 関西大・文・地理

[1] Graduate Student, Kansai Univ.; [2] Geogr., Kansai Univ.

<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/%7Emoto/>

2003年夏の第四紀学会で、木庭は沖縄島中部での大規模の「岩盤崩壊」を初めて次のタイトルで提示した。「琉球弧地背斜部沖縄島で認識された多数の地すべり地形と島嶼破壊過程との関わり」。さらに同様の現象について、2004年日本地理学会春季大会で木庭・森本・尾崎は、「北摂山地茨木市域およびその周辺で見出された多数の大規模な岩盤地すべり」として発表している。今回の発表は、沖縄島南部に焦点をあてたものである。

沖縄島中北部では北西-南東方向の胴切り断層によって北東-南西方向に伸びる島体は複数のブロックに分断され、個々のブロックは、木庭の「岩盤地すべり」によってさらに細分されている。今回報告する沖縄島南部にあっても同様の現象が認められたが、ここではより規模の大きい陥没性の「岩盤地すべり」を捉えることができた。これはいわゆる中城湾の形成と大きく係わる。

沖縄島南部の中城湾の形成については、Cederstrom (1947), Flint et al. (1959)の指摘以来、氏家宏（たとえば、琉球弧の海底 -底質と地質-）や木村政昭（たとえば、木村・杉野, 1982, 琉球列島の地質学研究6）によるものなど多数の研究がある。中新世後期～更新世前期の島尻層群はこの中城湾を含めて沖縄島南部地域では南東に5度程度傾斜しており、Cederstrom (1947)が指摘したドーム構造は認められない。ただ、琉球層群の基底高度からこの中城ドームは確認されている。

発表では、この中城ドーム一帯が胴切り断層で分断され、中央部で陥没していることを示す。さらに、この種のものは、未だ陸域ではあるが南風原町でも認められ、さらに金武湾へと続くことを示す。沖縄島主軸部は天願構造線より南部については、より北の中・北部軸と並列ながら南東にシフトする。南部軸は20万年前の間氷期相当の段丘面（木庭, 1980）や完新世ノッチ（河名, 1985）は中・北部軸のものとは比べてより高くなっている。中・北部軸には50万年前の海進に対応する海岸段丘が分布し、これ以降、隆起を続けている（木庭, 1980; Koba et al., 1985）。つまりは、中・北部軸と南部軸の間にヒンジラインが分布すると考えられる。

「大規模な岩盤地すべり」の形成は、まずは背斜軸の形成を必要とすると考える。背斜構造が形成されて後に、その頂部で、ここでいう岩盤地すべり、つまりは陥没が形成されることになる。中城湾と南風原町の陥没は南部軸の隆起に関連したもので、金武湾のそれは中・北部軸の隆起に関連したものと考えている。図参照

